多治見市文化財保護センター企画展

カミさま ホトケさま お医者さま

～医療と信仰～

はじめに

「病」と言えば、医者が診(み)るもの。多治見には、江戸時代以降の医師や医療の記録が残っています。特に幕末に流行した天然痘に関する歴史や、「陶歯(とうし)」の資料は多治見の医療の発展を示すもので、興味深いものがあります。

しかし人々は、医者だけでなく〈カミ〉や〈ホトケ〉にも頼ることもあるでしょう。日本各地に伝えられる〈カミ〉や〈ホトケ〉には、「病」にまつわる昔話が数多く伝承されています。身代わり地蔵や観音様といった石仏に関する話や、今も行われている地域のお祭りなど、其処(そこ)かしこに昔話が残っています。

そこで今回の企画展は、多治見市内に残る、今もなお受け継がれる信仰の形と、多治見・東濃地域における医療の歴史を紹介します。

一、古代～近世の医療

○古代の医療と呪術

日本列島への医学の流入は、五～六世紀ごろと言われます。それ以降、遣隋使や遣唐使、僧侶などが大陸より最新の医学を日本に伝えてきました。それと共に呪術や祈りが人々を支えていました。古くは、木製人形に人間の穢れや病気・罪・災いを託して流したり埋めたり燃やしたりする「祓い」の儀式を行ったり、平安時代には怨霊が疫病や天災をもたらすと考えられた御霊信仰が広がり、陰陽師や修験者（山伏）による呪術的な治療や儀式が行われるようになりました。

大針起４号窯出土
灰釉陶器（碗）▶
〔10 世紀前半〕

仏画と思われる線刻画を施した碗。頭上に宝冠を戴き、蓮弁のような台座（蓮台）の上に結跏趺坐するような姿が表現されている。
作られた目的は未だ解明されていないが、当時の人々が神仏へ祈りを捧げるために作ったのかもしれない。

○近世の医療風俗

江戸時代の医療は薬物療法を重視する漢方が主流でしたが、蘭学もオランダから長崎を通じて輸入されており、新しい医学を学ぼうとする人々は長崎を訪れたといいます。

また、気軽に医者にかかれなかった庶民は、いわゆる民間療法や呪い・厄除けを試み、神さまや仏さまに病気平癒の願掛けをしました。お地蔵さまやお薬師さんなどの石仏、神社・寺院のお百度参りなどが有名です。それらは多治見市にもたくさん残っており、今なお地域の方の信仰を集めています。

▲江戸時代の医師
『人倫訓蒙図彙』蒔絵師源三郎他
〔江戸時代 / 元禄３年（1690）〕
（国立国会図書館デジタルコレクションより）

○各地神社仏閣の御守・御札

江戸時代には、地元だけではなく遠方へお参りに行くことも流行したようです。これに伴い、各地の「名所図会」や観音霊場巡りの案内書が刊行されていました。それらを参考に各地の霊場を回り、有名な寺社を参拝することで、御守や御札を集めていました。

◀大杉の縛り観音（大沢町１丁目）
〔江戸時代 / 宝暦 13 年（1763）〕

縄で縛って願をかける観音様。願が叶った時に縄をほどく。
観音様の後ろの舟形光背には「〈右〉西国順礼供養同行中／〈左〉宝暦十三未十一月吉日」とある。かつてはそばに大杉があったという。

巡礼案内図〔江戸時代〕（個人蔵）▶
伊勢・西国・高野・金比羅巡礼の案内。各地の宿屋と思われる名が記されている。
写真は西国三十三所第三番札所・紀州粉川寺で配られたもの。

三、医師と医療・医学の発展

○多治見近郷の医師

江戸時代、現在の多治見市域で医師がいたのは、多治見村と池田町屋村の二村でした。多治見村は、江戸時代中頃の文書に「本村に医師一人御座候」とか「医師壱軒」とありますが、医師の名は記されていません。幕末になると蘭方医加藤寿算という人物が開業しました。一方、池田町屋村には小池家という医師の家系がありました。初代は寛永三年（一六二六）に開業といい、幕末まで代々二百年以上にわたって、地域の医療に携わっていました。

周辺地域には、久々利村（現可児市）千村家の医師・浅井家や奥村玄節、田中芳輔などがいました。一九世紀（年月日不明）には浅井家が多治見村西浦圓治の妻女の診察をしています。また、内津村（現春日井市）には鳥居良安という医師もおり、廿原村の人々を診療したり、多治見村など土岐郡の村々にも出向いていたようです。

○幕末の流行病

幕末動乱の最中、コレラや麻疹などの疫病が流行していました。コレラは「虎狼痢」と呼ばれ、その当て字からも人々の恐怖が想像できます。

そうした流行病の一つに天然痘（疱瘡・痘瘡）があります。天然痘はウィルスによって人から人へと

▲医師鳥居良安回診届〔明治初期〕
（池田町屋公民館文書 / 多治見市図書館蔵）

二、多治見市内に残る病気平癒の信仰

健康・長寿祈願

●庚申信仰

▲大原７丁目の庚申堂

人間の体内に棲む三尸の虫が、庚申の夜になると人間が眠っている間に天帝にその人の悪事を告げるので、天帝がその人を早死にさせるという道教の教えに基づくもの。庚申の夜は当番の家に集まって飲食を共にしながら夜を明かす風習があった。

●左馬絵の器

▼初窯で焼かれた盃と碗

「左馬（ひだりうま）」とは、漢字の「馬」を左右反対に書いたり、右向きに走る馬が振り返っている絵を描いた縁起物。陶磁器生産の盛んな地域や陶芸の世界では、新しい窯で初めて焼成する「初窯」の際、左馬を描いた器を焼く。この器で食事をすると中気（中風。脳卒中など脳血管の病気）にならないと言われている。

特定の病・身体に効験のある神仏

●耳神さま（小泉町３丁目）

▲鬼瓦
（耳を押さえる人）

昔、大原に住んでいた大変親切なおじいさんが「耳が痛い、耳が痛い」と言って亡くなってしまった。近所の人々はその死を悲しみ、耳の病気で苦しむ人がないようにと耳神様を祀ったという。耳神さまを祀るお堂には、耳を押さえて苦しい顔と治ってニコニコした顔の鬼瓦が見られる。

●歯ごきさま（大原町御陣屋橋付近）

歯が痛むときに、お酒を供えると歯の痛みが治まると伝えられる歯の神さま。昔旅人が「歯が痛い」と苦しみながら動けなくなっていたが、酒を欲しがった。村人が手厚く看護したが、その甲斐もなく死んでしまった。この旅人を葬ったその傍らに桧を植え、お酒を供えたという。現在祀ってある石の歯ごきさま（写真）は昭和 60 年に新しく作られたもの。

流行病平癒のお祭り

●笠原神明宮祭礼

毎年 10 月第２日曜に行われる祭礼では、華やかに飾った花馬が奉納され、境内を馬付きの若衆と共に駆け抜ける勇壮な馬駆け神事が行われる。

◀馬駆け神事の様子

この神事は昔、疫病が流行したとき、祈願によって救われたので、花馬を献上して御礼したと伝えられている。

●大念仏「なんまいだー」

夏の初め、旧大原村（現 23 区）内を「なんまいだー」と唱えながら、拍子良く太鼓と鐘を鳴らして練り歩く念仏行事。寛政 12 年（1800）大原村でチフスが流行し、悪病を追い払うために始まった。毎年７月１日から１日１町内ごとに、７日間毎夜行っている。

病気全般に効験のある神仏

●身代わり地蔵

各地に多く伝わる地蔵信仰である。多治見市内にも大原町普賢寺の参道にこの地蔵がある。
この地蔵は昔、子供の病気を治そうとして願をかけていた女の人が、夜、通行人を襲う曲者と間違われ侍に斬られたのを、地蔵が身代わりになって、その首が飛んだという。

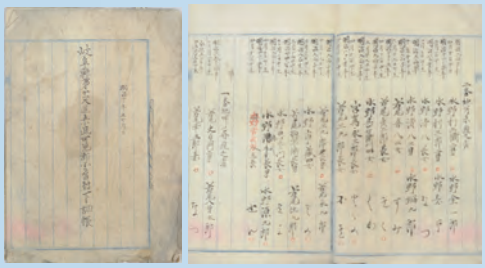
●津島信仰

市内各所、ほとんどの町内に２つの祠が並んで祀られてある。１つは防火の神さま・秋葉神社で、もう１つが津島神社である。親しみを込めて「津島さま」とも呼ばれる。津島神社は牛頭天王を祭神とし、疫病除け・厄除けの神さまとして知られる。７月中旬に市内各所で赤いちょうちんをぶら下げた「ちょうちん祭り」が行われる。

感染するもので、症状は高熱から始まり、独特の発疹が出現し、丘疹→水疱→膿疱と進行します。死亡率は二〇～三〇％程度といいます。日本最古の記録は天平七年（七三五）で、古代から人々を苦しめてきたことがわかります。幕末に天然痘の予防ワクチンが日本に伝えられますが、それ以前の治療は、漢方薬の投与や加持祈祷・お祓いが主だったようです。また、感染を防ぐ為に人里離れた山中に小屋を作り、天然痘患者を隔離していました。

一七九八年、イギリスのジェンナーが牛痘ウィルスの接種（＝種痘）で天然痘を予防する方法を確立しました。日本に伝わったのは嘉永二年（一八四九）七月、長崎で蘭館医オットー・モーニケ、佐賀藩医師楢林宗建によって接種が試みられ、その後各地へ普及していきました。

当地域へは、尾張藩の医師によって広まりました。池田町屋村の小池家の七代目良慶は嘉永三年（一八五〇）、尾張藩の伊藤圭介、さらに久々利村の浅井修真らにより種痘法を伝授され、内津村の鳥居良安と共同で、内津村庄屋宅を種痘所として施術することになりました。


▲種痘小名田村下調帳〔明治初期〕
（山田家文書 / 多治見市図書館蔵）

▲種痘済証〔明治初期〕
（小名田区文書 / 多治見市図書館蔵）

○陶歯（とうし）について

陶歯とは、文字通り陶製の義歯のことです。義歯の歴史は古く、古代ローマ時代の記録（一世紀頃）によると、象牙（ぞうげ）や獣骨（じゅうこつ）で製造していたといいます。日本では弥生時代の蝋石（ろうせき）を彫刻した義歯が発見されており、江戸時代まで蝋石や獣骨あるいは木製の義歯を使っていたようです。陶歯は一七七〇年代にパリの陶工が作ったのが初めで、日本では明治二〇年代に製造されました。当初は西洋式の製法ではなく、日本独自の製法で作られました。

▲黒色陶歯見本

多治見でも同じ頃に陶歯の製造が始められました。小路町の内科医で歯科診療もしていた小森令次は、明治二〇年代中頃に陶歯の製造研究に着手します。陶歯の焼成には奥川町の加藤慶九郎が当たり、黒色陶歯を完成させました。その後小森の跡を継いだ加藤慶九郎は、色落ちしない練込黒陶（ねりこみぐろ）歯を開発し、他製品が一歯四厘の時代に八厘で取引され、その品質は当時日本一と言われました。

▶陶歯製造型

○近代の医療器具

文化財保護センターに近現代の医療器具が寄贈されています。今回はその中から数点展示しています。ここで紹介するものは、およそ三〇～五〇年ほど前に、実際に使用されていたものです。カートリッジ麻酔器のように現在使われているものとあまり変わらないものもあれば、今はほとんど見ない陶枕、体温計もあります。私達が今現在使っているものと比べると、その変容が分かります。

▲煮沸器（しゃふつき）
医療器具の消毒・殺菌に使用する。

▼陶枕（とうちん）
陶製の衛生水枕。

▲歯科用カートリッジ麻酔器

▲水銀体温計

おわりに

幕末には多治見村に一人、池田町屋村に一人だった医師は、明治二〇年代になると、他地域からの移住開業によって増えていきました。西ヶ原遊郭の医師として来町した小森令次や中町知命堂の加藤恂、竹屋町（現新町）晩歳堂の加藤駒三郎などがいます。久々利村の尾張藩医師奥村玄節は長瀬に移り開業しました。また、伝染病の隔離病舎や町村立病院も明治期後半から建設が進み、昭和一四年（一九三九）、東濃地方の医療における中心的役割を担う、県立多治見病院が診療を開始しました。

明治以降、地域医療が発展していく中で、呪術的治療や信仰も民間の中で続いてきました。さらには、近年になって新たに健康祈願の祭礼が始められたり、病気平癒の地蔵が設置されたりしています。このように、現代でも呪術的治療や信仰は人々にとって生活の大切な一部となっています。また、古くからある小さな石仏や祠、お祭りもまた人々が伝えてきたものです。これらを設置、または始めた時期など不明な点も多いですが、地域の信仰の様子や文化を伝える貴重な資料にもなります。今回の展示が、当地方の医療やこれに関する民間信仰の歴史を感じとっていただく契機となれば幸いです。

（編集　三浦哲史）

※所蔵について特に注記の無いものは、多治見市文化財保護センター所蔵。

主要参考文献

・「東濃地方における種痘の展開」杉村啓治
『実学史研究Ⅶ』（実学資料研究会編　一九九一　思文閣出版）所収
・『日本医学史綱要1・2』富士川游（小川鼎三校注）一九七四　平凡社
・『企画展「無病息災 - 病を克服する知恵と祈り -』
名古屋市博物館編　二〇〇一
・『すぐわかる日本の呪術の歴史』武光誠監修　二〇〇一　東京美術
・『入れ歯の歴史ー最古の「人工臓器」ー』笠原浩　二〇〇〇　文芸春秋
・『可児市史』第二巻　可児市　二〇一〇
・『笠原町史その一　かさはらの昔話』　笠原町　一九八三
・『笠原町史その二　かさはらの石造物』　笠原町　一九八六
・『多治見市史』通史編上　多治見市　一九八〇
・『多治見市史』通史編下　多治見市　一九八七

謝辞　加藤和弥、加藤誠亮、黒田正直、古林茂、笠原町音羽区、ときわ歯科医院、笠原神明宮、池原神社（大原町）、鳳凰山永明寺（市之倉町）、多治見市図書館郷土資料室（敬称略）

多治見市文化財保護センター企画展パンフレット
「カミさまホトケさまお医者さま～医療と信仰～」

●展示期間
文化財保護センター：平成二八年九月五日（月）～平成二九年二月一七日（金）

●発行　多治見市教育委員会・文化財保護センター
〒五〇七-〇〇七一　岐阜県多治見市旭ケ丘一〇-六-二六
TEL（〇五七二）二五-八六三三　FAX（〇五七二）二四-五〇三三
URL http://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/

●発行部数　六〇〇部（印刷費用　一六〇二〇円）